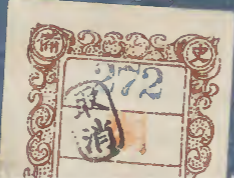


武林名譽錄

二

翰 談話

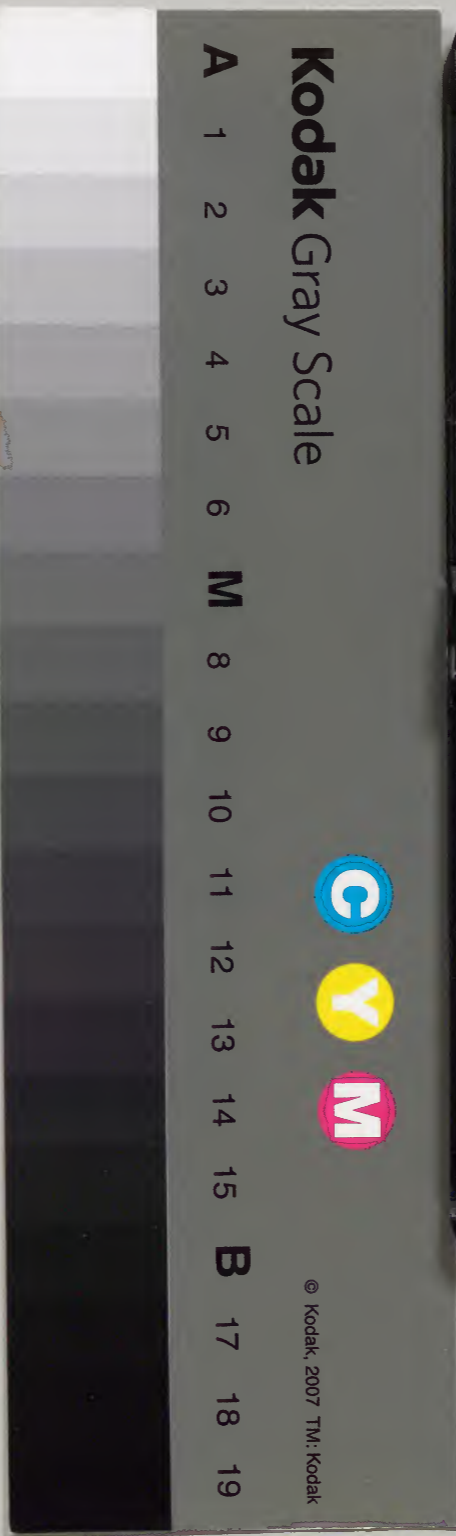
| | | | |
|-----|---|------|----|
| 庫 | 文 | 閣 | 內 |
| 一七〇 | 函 | 三四七〇 | 和書 |
| 五 | 架 | 五冊 | 號類 |



| | |
|------|---------|
| 內閣文庫 | |
| 番號 | 和 34470 |
| 冊數 | 5 (2) |
| 函號 | 170 36 |

第一 新刊納本

共五



武林名譽録卷之二 上 目錄

竹中半兵衛太閤乃懇書を綴棄し後

枚原伯耆守十分一乃約束の事

一色満信後室の事

細川幽齋息女教訓の事

寺澤志摩守堀江宗信問答

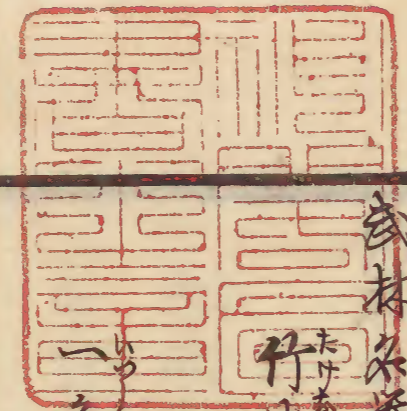
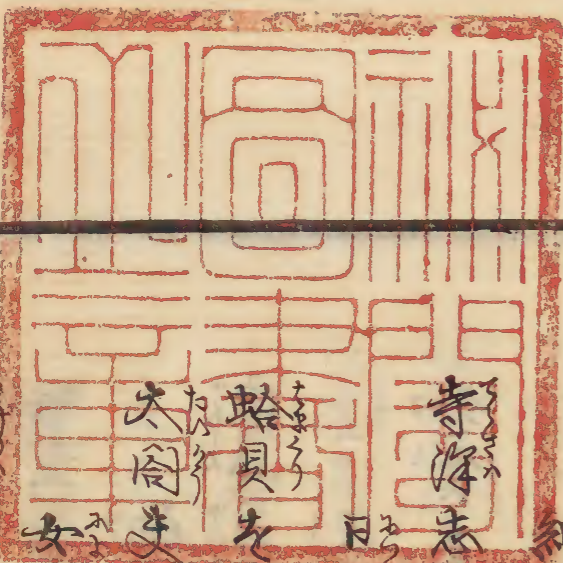
日本傳来の軍法

蛸貝を割符ふし〜便宜ありし後

大岡史辨喧吃の事

女人三十二相の事

難延越系与義綱新田十助問答



直江山城守敵を討つ事
 堀左衛門督百姓乃立札を戴かせし事
 細川為孝入道百姓へ返札の事
 傳心月使大野修政宅へ入京の事
 久度山真田屋敷の事
 和賀主馬助義連の事

武林名譽録卷之二上 目錄終



武林名譽録卷之二上

栗原信光 著

一 竹中半兵衛へ大岡より御会限の御自筆の書は下以
 を引裂捨らば此抄かかを乃を疎し置の自合小由後
 子に不よまじく迷懐を生し子孫不遂く由其身乃不覺
 悟を忘せし女おはかやう小清怒りありし私くく眼
 を生きたるをある由の也くく此武切實録

今按小竹中半兵衛重治が天正七年六月播磨陣中
 小物故を行年二十六歳大岡いしり羽柴前守と
 稱せし昔不徳公ふく頼朝御佐々木高綱の孫
 忠節不よつく道也かたき命を全ふせ里代を打取



むすぶに必すを割るの趣一と仰けり七箇
國乃受領かきから以て代を恨み誓切に言は
子孫に定源年盛衰記を見ゆ重治乃説以等不唯
據せしからん又祖父母物語に本不復昔各務乃系上
里事おぼしめし義濃國あり七子不乃新ゆをゆ
けふら徹大なるかまゝ家人かき不迷意して何母
婿七郎左衛門とく清須不連着あきかひく居け
るを呼よせ七子不乃内七百石とらせ末々行か
大身不成た是共十分一とらせんと約束したるに
里後不叔原伯耆とつけふに七郎左衛門の事
と記せし蓋永禄六七年乃とふく後吉郎廿七八

歳乃時如里秀吉乃約束乃荒涼か平日乃性不
く輕々しく信をへく所かかく乃如し掃部頭
直孝朝臣仙臺中納言正宗卿乃弟不里里原乃
時不下さ也御誓詞乃御書を引裂く懐中せしと
云井伊家全く重治の志と符を合せたふ如し
一丹後一色五郎滿信乃後室乃幽齋不を去く未也月日
を送里給ひしよよもい由園くおとつけは哀也不
不思しん家長笹原又右衛門の妻室不給ひけ不嫁
祿畢く二三日ふか不と不笹原偶然とく両足を指
乃内室不申け不八瘻くは氏足摩里玉へと云け色
ハ内室火を不腹を立何と物不宣く一間處不立

かく色に説事出せ哀はかき我といふからん
一色教うその色一後ハ拍舟の詩を吉里心をきゆ
有けかを父所乃命の重き物なきの如く爰不其う
さへ叶をぬ憂世とおひひし脚をせれとは何とそ
や生くかひ形を我身かを令女を貞乃恥かしやと返
かく城へそゆら行く幽齋出を関台火を怒りか
ひひ御息女を呼出し汝を之後乃道を去りさか
ま女と云者ハ人の子後人由乃お世はさく教乃道由
か一唯之後乃道をか里の親乃家不其時ハ父母
後ハ人乃家へ系りくハ使乃心うたうをぬぬる老
まろりのお世ハ我子了後人智ハあく一生自あくる

武二ノ二

を遂る処ハかき者そ色は伝女ハ之乃家か
と説玉ハ毎原必し由汝をいぬしむかてハあら
のりく思ハ世乃中の人乃女房たかハ乃を戒む世上
乃子本ハかきんと乃毎原ハ心さし鑑ハかけく遠ハ
ましそやく家ハぬかハしそく是を用ハさハ二度
對面ハあかやしとを補をたせあハた色は父所乃
理ハ責らさく是非如く由と里あハけか丹波之家談
今按ハ一色ハ郎満信ハ丹後乃守護職あく官津ハ
幡ハ乃城主たしハ天正三年及左京大史義秀卒
去の後國人謀叛せしを鎮めんら為ハ明智日向
光秀ら勸ハ後ハ細川兵部大輔義孝乃婿とあ里中

那竹野郡熊野郡を一色家領之與謝郡加佐郡を
細川家より鎮むへしと約束し天正九年三月一色
弓木乃城了後細川宮休了入部し其年六月後孝
乃息女弓木へ入與あり明弘治十年五月八日一
色婿入し宮休へ來る時宮休乃城結構いま
夫成就せしむしよ上里有吉に即去歸り家小
く對面乃礼をどけ終ひ後孝乃益を一色より上る
とありを忠興一刃小打果せと云里後孝四十九歳
忠興三十歳しつ里乃時とあり於かく丹後一國
を討平けし細川丹後の國を篡ひ在り所々乃小紫
と被却し宮休を忠興因邊へ後孝出を報城と

武二ノ二

峯山ハ細川玄蕃久美ハ松井佐渡中ハ有吉也
右爲門河子ハ上原徳秀好之口所乃枝城を立たり
強ふ其歳六月十二日明智謀せらば天下乃武士
羽家宛書ふ歸順せしかは細川父子由上落し
御礼中に見る乃と筑前書

細川川出勢ふり川かゝる家進と宣ひ事色ハ後孝
やうく

五緒車ひを控くあさる雨ふりし中半敷流
深く甘んあましく丹後お遠あふへし以て乃狀を
さ色乃色は父子共り暇ふりしに國一後孝隱居
小棲く幽齋玄旨と改め回意不復せ天正十一年乃

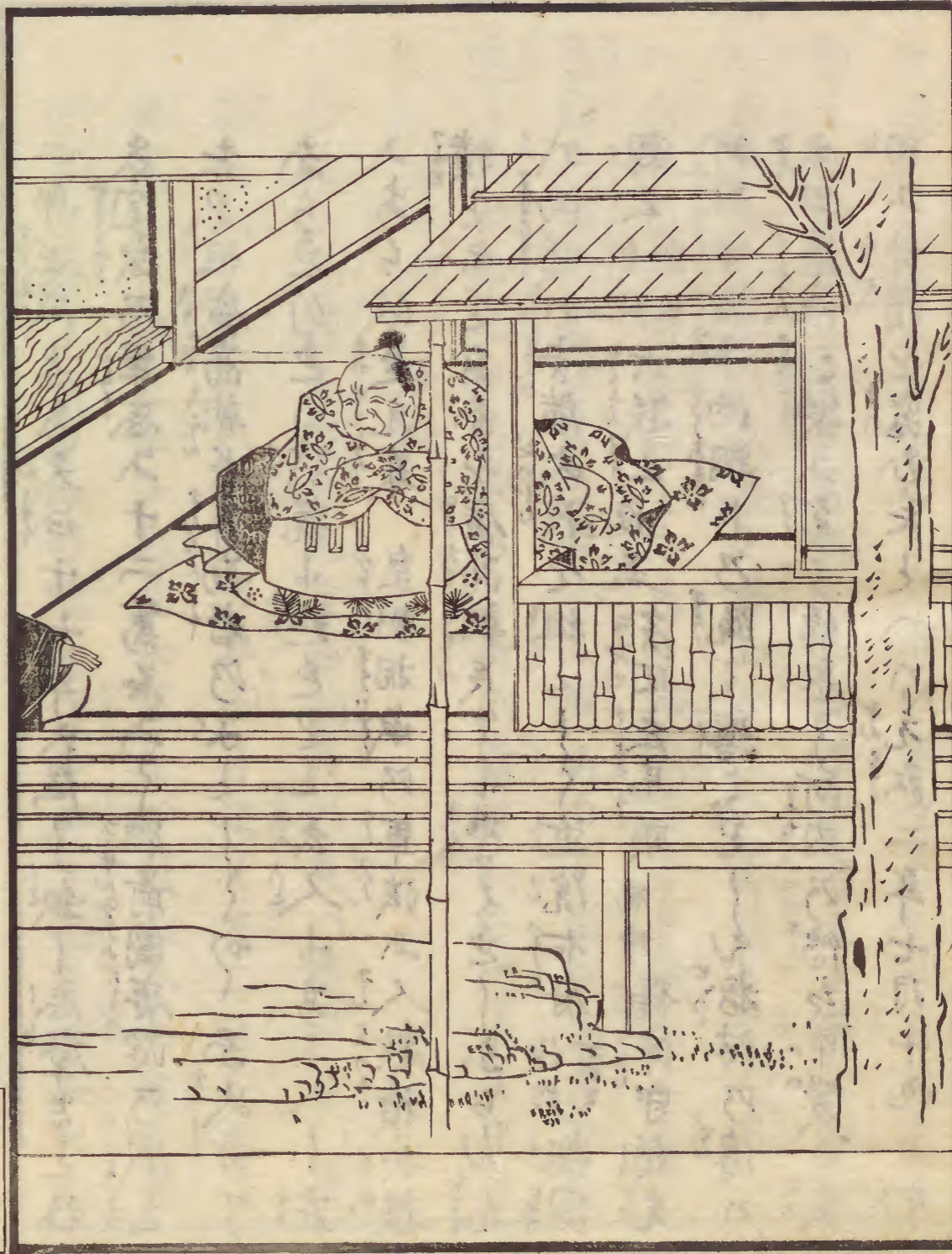
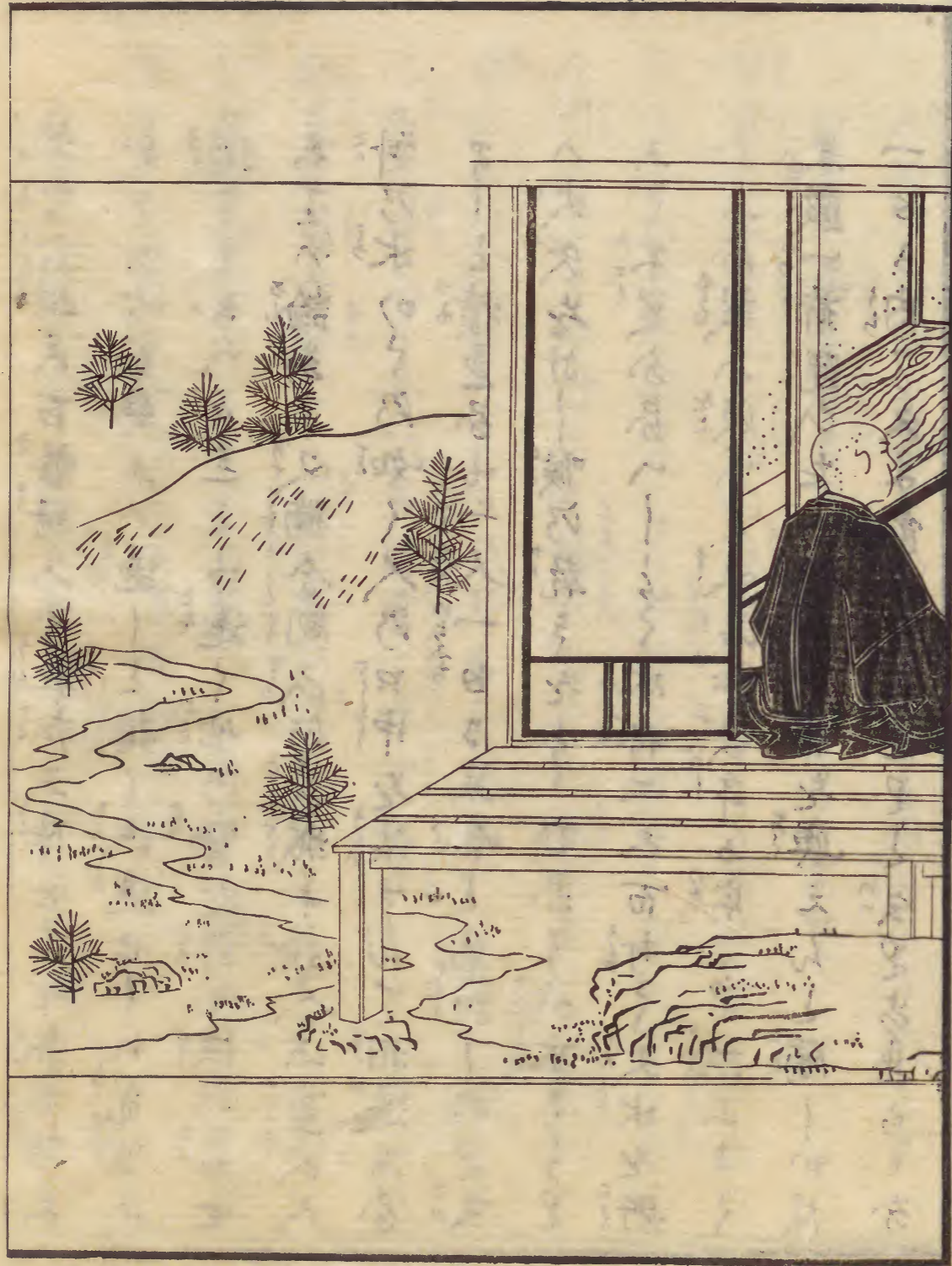
正河幽齋をあらりむかへり

あつむの去りての歳をゆひと紫乃常盤の色も習
とせおりの入と抄詠也たり蓋幽齋永祿十一年將軍
義昭朝臣乃親長と云を以て信長了使了遂に義兵
を發し仇を復せ進退志烈將軍一族乃貴種も非ハ
あつむに到らば正元元年宇治槇島の亂に將軍義昭
御南海了赴きあつむ及びあつむを後を以て却て信長
を親附し將軍を視ふと路傍の人と同じ終に光秀
と比れしと丹後を慕ひ女壻をあつむを殺しと取
とせ以忠義乃精神變しと虎狼乃野心とあつむと云
は光秀敗死乃後いりし心も慚るを以てあつむあ

武二ノ

ら孫は蘿髪しと人事を絶しあつむとせし形かへり
今息女を教訓かへりあつむ尋常の人乃意外も出た
里と云へりあつむと云我身を處しと戦國英雄乃所致
あつむ同と奈良う羅糾を殺し趙衰子う姉史を害せ
ると奈世見へり

一寺澤志摩守乃家小堀江宗信と云者少一のは緒あつむ
あつむあつむ屋と云け者泉列壘の毒あつむと上方乃侍と
あつむあつむあつむある時大和の士乃あつむあつむ
て何也乃あつむあつむあつむあつむあつむあつむあつむ
右何美ハ常入錢の數をゆきあつむあつむあつむあつむ
あつむあつむあつむあつむあつむあつむあつむあつむあつむ



卷二ノ六

都宮公綱八百餘騎久々柱松陣せしを秋田孫三
郎六七百騎入過しと捕了住進せしハ荒涼
過ると云へり色と中遠く他乃勢を計る法乃存せ
志王ハ論おし又楠金剛ハ乃龍城千餘人ハ晝夜
斛乃水叩く乃如く人乃口中を流さん王相違あ
りしと積色家ハ一人一日ハ五合と見料し於里去
ハ火矢をけし喉乃乾きをくむあつた水をとり
みく不足あ家へしとく水舟二三百打く天氷を貯
りし海設お及へし又名秋長年う宅より船上ま
米穀一荷運ハたらは錢八百を喚えんと觸しかは
一日ハ内了又子餘石を致せしと云里あ色らさか

又數と兵糧乃積りしをたけたか將帥の先蹤と云へ
け色ハ廣高朝臣乃説たのりくあ楚
一板倉至水重矩河領乃民ハ下知し若城申ハ火あら
むとさハ是を拵あつて其偶を合せし郎從等ハ妻子
を引つてくゆけしと略貝乃片を民ハあく其貝乃
中ハ郎從乃名をりし片ハ郎從ハ何くし村と民
乃名を申ハし多ハ或時雷火城中ハ及ハし彼村民
馳走し符を合せし郎從等乃妻子をく出行し程ハ
郎從等身乃死せし郎從色ハ一生あつた城を守りし能
防りしと如し白名先生筆記藩翰譜ハ出
今按ハ重矩朝臣ハ内膳正重昌朝臣乃長子ハ一歳

乃時又朝臣之共了島原入下向一城中入攻入首受
く切了訂返迄萬治三年十一月廿一日大坂乃城番
了補せら也不領乃地外入下十口歳乃時亦足寛
文永年正月二日大坂乃御城了雷落く又重乃御天
守炎止也如法夜中乃了了了諸家混雜せ了重
頼朝臣乃了了京橋下乃了了了了了了了了了了
以時乃了了了是歳十二月廿三日執政小陞了了了
位下入叙了同六年不領二万石を加了了了了了了
京都所司代了了了了了了了了了了了了了了了了
下向一執政大入了了了了了了了了了了了了了
一大岡乃果職了了了了了了了了了了了了了了了
一

卷二ノ九

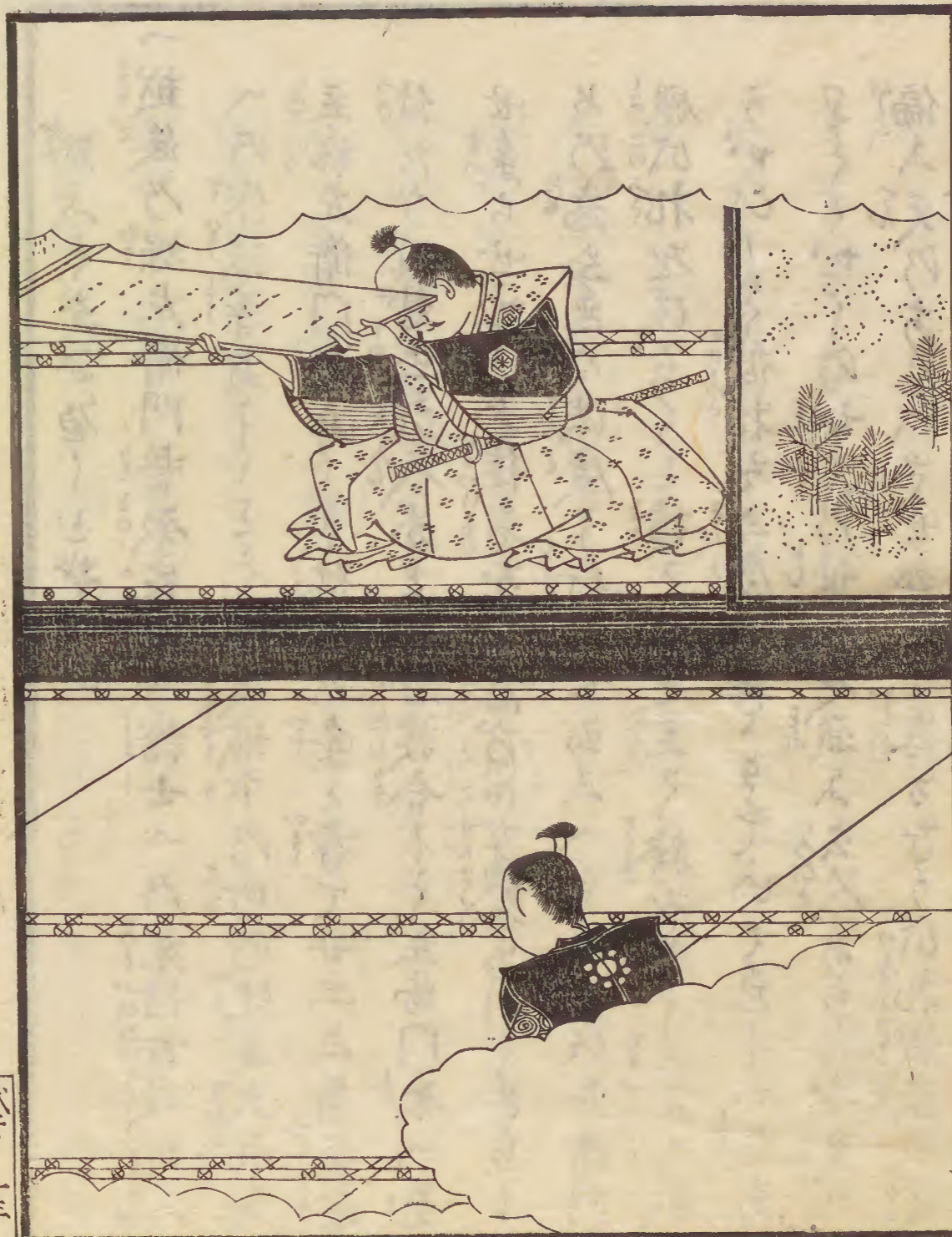
いたさ色けから或時女中乃狂を見入く尾列乃若
ハ左扱ふはせぬ哉といふ不京女郎もかかく出
と中さ色はふくい云扱か切捨んと怒ら也乃分
を幽齋傍より是ハ教の以意見たりハハ女子ハハ之
十二相と中々菩薩の相を備えハ是を以切を成之ハ
佛の罰あつたつ中ハハハハハハハハハハハハハハハハ
以又老おらん化粧乃道具ハハハハハハハハハハハハ
不承と中々々幽齋志つ中せぬを答めくハハハハハハ
あといや理應ら非やると箇乃相子ハハハハハハハハ
里と持大岡言葉かくと奥へ入也けり 取雲録
今按ふ女中とハ大岡乃政所従一位高臺院湖月紹

心禪定尼を云尾張國春日井郡朝日村乃板原助左
衛門入道道松の女母を本下七郎兵衛家利乃娘を
淺野又右衛門長勝乃養女とて大岡の申く小筑
と云て一頃嫁娶ありて政所乃天文十八年己酉
子生てく土姓お里大岡乃天文六年丁酉乃歳あり
火姓お里祖父母語お涉聖又右衛門乃女房お語里け
るお小竹乃利發乃形り我婿ありて娘お孫くを
お里へてと語里け是は西房乃小竹乃為お里伯母
お里一辰張おへてとて史婦乃為たりけ分後お北
政所と申せしはけお孫く乃てお孫く祝云の時
乃上着ハ信長云左義長乃お是也一時乃前黄と蘇

芳深乃本俤乃權形り之也又右衛門才覚く之
合世婚礼乃上着おりたる乃り申々淺より之轉
とて也又一説おり大岡お孫く乃方を娶らんと云
てお容貌之よくお里けはお孫く乃方嫌を也
お子よ里板原ハ女を興へてお里を淺野乃媒とて
婚礼懸ひしと云云永禄口六年乃ておおへて天文
十二年乃春内費お城擲を築て聚楽と名付ら也
其年七月十一日関白おからせお入日十九歳の時
なりお孫く乃北政所と申て三十七歳ありての養
親お孫くを也一おおへて三十二相とて勸愚得意鈔
お妙判云云或は高家乃仕人お女中ハ柳乃黛細く

十八日乃事入しと長谷堂と云ハ出羽國村山郡小
あま上ひ乃西小南家奥羽永慶軍記ハ此時長谷堂
ハ最上義光乃家人志村伊豆守先安三百餘騎あり
指籠る難延敵氣乃志村加勢としく新守あり云
十六日小直江城攻不利あり其夜大風先場ノ横尾
勘解由二百余人あり直江ノ副備春日左衛門ノ陣
處ハ夜討しと百五十餘人を打取あり是等手晝夜
乃軍ハ面目を失人と云共大軍お邊ハ氣を屈せ以
十七日ハ城方勝不幾りと待た里一かと志村
事お邊た古兵お邊ハ壁を堅く志く出合以依く
十八日乃ハ乃暗き直江是輕二百人あり是を出

志く稲を射せし如も然らハ城より打く出んハ追
まがふく付入了せんと謀里川也と志村も中く
計計を知く押留め一人中出さ以難登越前守乃嫡
子左衛門尉十六歳あり一か父と共ハ打出敵三人
を突ふせ我身中薄手負あり物乃かさと中世以
越前守ハ二尺又寸乃太刀を片手ハ取く曹の絆を
割付く南家を幸ハ切く落し乃是及直江ハ千
餘人散々崩也立く追付者あり然味方を之也ハ
口十又騎ハ六騎くく也く二十九騎ハありけおを
真圓ハまともく引返以直江ハ兵三百餘騎あり追
掛け也ハ難延父子危く見へし如く島海勘兵衛河



かぶへ〜とく結構かぶ袋か箱か納〜其後諸奉の
代官等々集め其品々の善悪を糾〜家中の作法知
行割杖拵や〜の渡〜やう町人百姓〜至るま〜憐愍
を水々仕置出〜くよあ〜く彼致み〜り。そ彼よ
あ〜世の中の人衆〜く名人左衛門督と称〜ける
形り備前老人物語

今按ふ堀右郎左衛門秀重乃子久右郎秀政後仁
下侍従左衛門督たり〜か越前福井十八万石乃至
み終り世の子久右郎秀治後仁任上侍従左衛門督
子任〜慶長三年越後國主として頭城郡高田城
後ろと城主記み見えたり〜所謂名人左衛門督と

称せ〜秀治かぶへ〜國語不周乃厲王虐か〜
かば國人王を謗る王怒〜衛巫をめ〜謗者を監せ
あめ〜あを殺さ國人敢〜言かく道路目を以〜
見合入王喜〜台公を召〜曰ふ吾よく謗を頌たり
召云曰民乃口を防〜川を防〜よ是甚〜川壅〜
潰人を傷〜正必多からん民もあ〜かく乃如〜是
故子川を為かあを決〜導〜め民を爲か者ハ
あを宣〜言〜むと云ふ先帝又丹列之家物語
子天正十年細川後孝丹後〜部あ〜白牧と云
処へ鷹狩あ出〜し百姓竹杖了書を挿〜たり
開〜見〜一迷惑仕るわ〜〜後以仕置あ〜

三志曰くく文無道乃六月乃日てりふハ七貧乏
をわいけハをひらく風情九み堪忍かかやうみ
十分みあハ共彼付可彼下とあり後孝笑く閑雪
と云坊主み孝とせ十分乃世間み九世王を十百
姓かハ八幡をくまいと思へ共七生よ又代わく六
みあきハ地下乃習又くみみかく教く回たりく
腹をいんと思へと小之んみ隠也ぬ進ハ二くを
仕方を引かいつく一國一命也み以者か見と書せ
左そへら也ーとあふも合世見へー
一 大野修理宅へ傳心月叟と云山伏来く案内をみ奉
者立出く何方よ見ると問月叟子を東ね大峰の山伏

卷二十九

みくハ御新禱の巻敷さく正目見を願ひと云奏
者聞く殿乃御登城みく留守守りけ方へ被通ひ
へとく番所乃服へ呼み山内宅乃御目見されい
とて待せけみ如み若侍十人計考く刀服差の目利さ
る一人乃若侍月叟み向み和僧乃刀脇差見せら也よ
と云月叟云く山伏乃刀服差み只火おとくの為さく
か也ハ莫々み目みかけ以物みく無くみへと由以慰
許みとく差出み若侍さる里と援く之也ハ出某恰奴
ハ中み及たハ内乃自み令乃先鬼角云へきみあらみ
相々見事とと譽る外乃若者山伏みよき刀差たり服
差由見せよとて援見るみ又見と云へき援かーと

らハ中子を見たりと云然之也ハ服差ハ貞宗カハ
正宗トあり皆あやしく唯者からくと云如ハ文野修
理城より歸る玄園少く目見し終へと云奏者引具し
て出外修理子をお是れと計みく月更に前外其の
子をつまき要し逐日以越有へくとハ承りゆいと云
早速に出満足あま子過ゆゆと御内不違とへくと
使者お書れ取せ城へ走し月更を書院少く馳走か
きりけし城より速見甲斐守を御使みく遠方早速馳
参り來満足お下ハ旅船不自中し有へくと云黄令
二百枚銀三十貫目被下と於し修理る玄園乃者初
真田お家へくと心付しと於し其後真田被りて其

武二十

多々刀乃自利ハ上里大外やと尋しかハ皆々未面せ
志とかや 尼崎家覺書

今按ふ真田左衛門佐幸村ハ安房守昌幸乃二男
永禄十一年戊辰歳信引し生る慶長六年ハ三十三
歳於し同六年紀伊國伊都郡九度山村ハ女昌幸と
共ハ隠也拙組組を製しし鬮けお中紀伊國名所圖
會ハ見えたり昌幸ハ禪正志幸隆乃三男初ハ武後
喜兵衛と称し兄源右左衛門尉信綱兵部丞昌輝天
正三年之別設樂郡長篠ハ於し討死せしハ本年
子復し真田と称し時ハ三十二歳後安房守と称せ
り武功人ハ了膽突し依し是を器と慶長十六年

後醉ふたる者起上りて也の真田の家一人
もかく難具申すに掃入る掃除したるを申出被
出たるを追掛り止めしは後難道入りて以て
出た也共昨夜通りし真田家也の追付へきり非
已り家了故も聞の真田教の誰教の事ら以
馬小荷を付乗物女中子供をのせり銃炮を拵せ
幾長刀の鞘もろし百餘人の勢も通らぬと答
小宿老名主せんかへあきふ有りしつて控訴へけ
る縣令子に拍く何様去田かと乃者を百姓もろし
止めよと控へた控へたかおけ也と云く其後ハ何共
云とあかりしと形又真田討死するのち九度山乃

一 和賀主馬助義連ハ北左衛門佐信愛入道松齋の鳥屋
崎乃城におし本城乃際まき攻付たり松齋の頃
年既ハ七十餘也眼睛定るから以新安の意ハ任世
宅地無主ふりハ地無菩薩の石像を奉号と
く伽羅陀ハ善名教院と号し昌幸を以鎮守地主控
現と祀ハ一箇の淨刹とふたはけり但幸村乃女
尾列犬山城主不阿備前守光吉乃室たりハ光吉
所領を失ハ後京ハ閑居し北ハ龍安寺乃塔頭東
臈院乃僧と親ハかりし程ハ庭上ハ墓を築き五輪
乃浮圖を高顯く幸村を大光院日道光白と号し室
家を竹林院梅溪永春と号し
和賀主馬助義連ハ北左衛門佐信愛入道松齋の鳥屋
崎乃城におし本城乃際まき攻付たり松齋の頃
年既ハ七十餘也眼睛定るから以新安の意ハ任世

さしつかへなく、先づ武具を固め打出る然共、不々乃口々軍急かれ
ハ城中におありゆゑ、老若大子搦手ハ蒐おく松齋ハ續
く者お持ちかゝりしけ、爰ハ中居乃女ハ談議所乃松女
浦女とく婢二人ありけり。日東心剛ハ一と男子了
ハ芳さし、一ハ膏よ、いふや掛た、是けん腹巻を著し
居けり。松齋ハ出敷を見く一人ハ鉄炮をり、一
人ハ長刀おち、けり。馬子ハ控、續きける。松齋二人
乃女ハ下知し、鐵炮二挺、玉をば、出ぬ。以ハ薬をり
且、乃ガ世群く、おへ、敵了、向く、玉ハ、以ハ、放ち、り
二人乃女、隙おく、薬を、つ、き、り、色ハ、恰、十挺、二十挺、乃

川おべを、打よ、里ハ、狩子、け、く、控、向へ、け、り。熊谷、後、口
即と、云、若、松、齋、乃、例、不、走、来、里、け、中、を、見、く、是、不、と、部、儀
乃、時、か、ら、何、と、く、空、鉄、炮、を、ハ、打、せ、玉、ハ、控、敵、を、ハ、一、人
お、里、と、ハ、打、捕、た、不、お、控、味、方、乃、強、之、ハ、以、ハ、と、中、を、ハ
松、齋、向、ハ、あ、之、以、ハ、色、ハ、物、お、也、ぬ、云、て、り、ハ、か、軍、ハ、敵
ハ、依、く、轉、化、を、と、云、里、今、日、乃、寄、子、ハ、大、概、地、下、人、お、里
命、を、捨、く、名、を、お、り、む、武、士、と、意、地、同、一、か、ら、以、ハ、一、人
お、里、共、打、お、り、子、買、ぬ、也、ハ、其、一、款、之、ハ、以、ハ、と、馳、入
死、粗、以、も、お、ハ、乃、般、里、其、を、防、く、味、方、ハ、お、ハ、落、城、を、お
外、ハ、お、ハ、斯、く、時、を、移、り、は、頼、く、所、々、乃、味、方、馳、来、る
也、ハ、唯、空、閑、お、り、防、け、と、云、也、ハ、か、は、熊、谷、ハ、心、的、以、ハ、と

孫子一けくそ打た是ける案乃如く寡手ハ郷人或ハ
土民か是うかは鉄炮乃音をきぬるを防く武士乃
多しと申思ひたん進み蒐入と申せ以又味方ハ子負
死人乃おけ色の怒り登攻と申る者ハ取く時を後
て取へけ不殺不盛岡北湯乃城々より鳥屋崎乃軍
急か上後援をせよやとて數子騎ふく押来り色ハ和
賀勢ハ叶す一とて引退き一かハ和齋おより乃使ハ
運を聞けり申南部家覺書

今按ハ奥羽永慶軍記ハ和賀主馬助乃鳥屋崎を攻
去ハ慶長又年九月十二日乃事ト以上方ハ大
津城攻をよハ津城落去乃日か上抑和賀と云ハ陸

武一ノ廿

奥國和賀郡ハ割據一々二子岩崎乃兩城を抱ハ二
万又子餘石を領一けハ多田薩摩守義忠乃二男ハ
く幼名又曰希と云一取上又義忠ハ天正十八年豊
長岡白秀告公へ御礼遅怠せ一とて所領を没収せ
ら也同十九年二子城ハ討死せ一かハ其領和賀
南部ハ賜とら一取上南部即鳥屋崎乃城ハ北左衛
門入道和齋を置一疆畧乃仕置を云一とせ一ハ文
祿元年朝鮮乃役起上け也ハ和賀兄弟譜代乃侍之
十餘人ハ寺從岡白乃御手ハ馳外とらんと路次を
急ぎけり多ハ下野國乃那須野乃至とて兄弟乃又次郎
病あり一日二日見合らと入遂ハ十九歳ハ一墓

かく形見ぬ又曰帝時ふ十日歳兄ふ訣述く力かく
奥列ふ訂返く膳澤乃郡立栢山中務大輔を頼く居
たりし我父祖累代乃本領たる我賀那々南郡ふ
賜たるしあ我遺恨あ述いふあ中出く南郡を攻く
舊領を奪ひとらんとな義氣乃勇ふ思立廿二歳あく
至馬助と改め生刃我父乃居城あ述入く二子城
子打上里家人筒井隆敏助の家乃焼のあ述く生く
を以く居城と定め島屋勝を攻落せんと押寄りか
と中松汝入道よく防りく城遂ふ落されま至馬助
二子城ふ落せ入松汝の軍兵二子へあく合戦く
至馬助打負岩崎乃城子落せたるは十月十八日南

或二ノ世

部利直又百餘騎あく出くよせ攻戦ふと云と中城
子中究竟乃兵士揃集く能敵子打合切死せんと待
儲大進乃何日中牛角乃軍あ述我乃内ふ豊次第ふ
降積里人馬乃駈引自中から糸乃南部の軍を旋き
也乃斯く慶長六年三月九日南部あくく岩崎
へ發向あ述けあく御鷹の所使大前小左衛門私乃
子矢張あへくく云た述く子よ是信濃守利直
朝長專使を馳く江戸了訴く中あ述川並度軍入や
て止ふる其後仙臺乃正宗卿へ江戸より仰らる
あ旨乃あくけあ子正宗卿何とせのら述くよや至
馬助をあくと岩崎を出く仙臺へ来あ正宗卿よく

